

## 第 46 回大阪府学校教育審議会 概要

1 日時 令和 5 年 7 月 13 日（木）14 時 00 分から 15 時 45 分

2 場所 ホテルアウィーナ大阪 4 階 金剛 （大阪府大阪市天王寺区石ヶ辻町 19 番 12 号）

### 3 出席委員

氏名	職名	専門	備考
明石 一朗	関西外国語大学短期大学部 教授	教育学	
浅野 良一	兵庫教育大学大学院 特任教授	教育学	
有明 三樹子	りそなビジネスサービス株式会社 専務取締役	企業関係者	
池田 佳子	関西大学 教授	日本語教育 国際教育	オンライン での出席
大継 章嘉	大阪教育大学 学長補佐 特任教授	教育学 教育行政	
小田 浩伸	大阪大谷大学 教育学部長 教授	特別支援教育	
川田 裕	学校法人常翔学園 理事	工学	
小酒井 正和	玉川大学 教授	ICT	オンライン での出席
小原 美紀	大阪大学大学院 教授	労働経済学	オンライン での出席

### 4 審議会概要

(1) 会長・会長代理の選出

会長に浅野委員を選出した。

会長が、会長代理に小田委員を指名した。

(2) 諮問

「府立高校改革の具体的な方向性とそれを踏まえた入学者選抜制度のあり方について」諮問した。

### (3) 審議など

○事務局より、資料2「第46回大阪府学校教育審議会資料」について説明。

○説明内容を踏まえ、委員から意見聴取

○欠席の異委員の意見を事務局より紹介。

<異委員意見>

- ・府内の公立小中学校のカウンセラーとして、平成8年から府内の小中学校に携わっており、その視点から意見を申し上げる。
- ・1点目は、高校進学傾向について。学力が高い生徒は、上位の府立高校を第一志望とする傾向。次に経済的に余裕があること、大学進学を見据え、自力では勉強をしないから、例えば宿題の確認等を通じ、勉強をさせてくれることに魅力を感じている層は、私学を専願とするように思う。また、支援が必要な生徒、グレーゾーンと言われる生徒も含め、学力、経済的な余裕、ともにしんどく、公立を志望する生徒は、定員割れや志願倍率の低い府立高校に行く傾向にあるが、中退者が多いと感じている。中学校のときに不登校になった生徒は、内申点が非常に低いことから、不登校生の受入体制を整え、積極的に受け入れている私学や、私学の通信制や定時制、単位制に行く人も多い印象。
- ・このような傾向を踏まえると、私学を専願する生徒に向け、普通科高校の魅力を向上、発信すること、学力的にしんどい生徒や不登校等の生徒に向けた手厚い指導・支援により、卒業まで導き、それをPRすることが、府立高校に行きたい生徒を増やすことにつながるのでは。
- ・2点目は、魅力ある学校について。魅力を感じ、進学したとしても、意欲を保ち、卒業までどうサポートするかも重要。国が掲げる“学際領域”は個人的にはとても良いと思う。大学との連携や、入学時から3年間、一貫したテーマで研究（探究）を行い、プレゼンテーションするなどの取組みは面白いと思う。そのような取組みは、一部の府立高校でもすでに実施されているものだと思うが、その他の学校にも取組みを拡げることで、府立高校の魅力の1つにもなるのでは。また課題となっている、子どもたちのコミュニケーション力・語彙力・国語力の低下に対する取組みとしてもよいのではないか。
- ・3点目は前回の答申で示されている「生徒の状況に応じた学習・支援機能の充実」について。この部分の具体化については注目しているところ。予算の関係もあると思うが、キャリア教育の専門家や心理士、スクールソーシャルワーカーなど、専門人材が学校現場で活躍できるとよいと思う。また、生徒個人への支援として、チューター制度のようなことはできないのかと考えている。専門人材でなくても先輩や卒業生が進路や学習、生活の相談に乗り、卒業までサポートするような制度があってもよいのではないかと思った。そういったものが実現すれば、府立高校の魅力の1つにもなる。

○浅野会長の指名順により、出席委員が発言。

<有明委員>

- ・企業、企業経営に携わる者として、高校教育、またその将来に向けての道筋をどうつくっていくのかという点は非常に重要であると認識している。
- ・昨今、ダイバーシティ&インクルージョンはもはや言い古された言葉で、世間にも認識されたものであると思うが、最近は“DE&I”、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン”という形で私たち企業サイドも取組みを進めている。間にエクイティがはいったことで、なにが難しくなったかという点、公平性への対応。公平性とは「みんな平等」ではなく「それぞれの事情や立場に合わせて、公平に情報が取れる、機会が提供される」ということ。例えば育児休業している、もしくは子育てをしている従業員にテレワークを勧めるよう、政府は発信をしている。テレワークをしながらさまざまな会社の業務に携われる、ステップアップすることもできるキャリアアップに向けた研修機会も得られるそういった機会形成を個別の事情にてエクイティ（公平性）としてやっていかかなければならない。こうした対応は企業にとっても非常に難易度が高いが、それにチャレンジしていかなければ、企業価値が高まらない、すなわち国力が付いていかないといわれている。そういった意味からも、今回テーマに入っている通信制の人気があることや、日本語指導が必要な生徒が多くなっていることもそうであるが、今の子どもたちの個々の事情に合わせたニーズ、子どもたち一人一人が、自らが得たい教育、自分になりたいもの、学びたいものに接することができる機会をきちんと提供するということが求められるのだと思う。
- ・最終的にどの学校に行くのかを選ぶのは保護者の意向も含め、ご本人であるとは思いますが、こういう機会があることが子どもたちにしっかりと伝わって、自分が選ぶことができる、選択肢を持っているということを伝えられるような教育の仕組みをきちんとつくっていくことが大事なのだと思う。
- ・一方、企業としてはもう一つ難しい問題として感じていることがある。昨今、コロナ禍を経て入社してきた新入社員で、会社に来なくなる方が意外と増えている。また、職場の中でコミュニケーションがうまくできず、何か問題があるわけではないが、なかなか業務を習得できない方もいる。一方で、ハラスメントに対しては非常に敏感になっていることから、同僚の男性がフォローするために、「大丈夫だよ」と肩をポンポンとするだけでも、ハラスメントだと申し立てをしてくるようなこともあり、人間として、ヒューマンな接し方の非常に微妙なバランスを持つことができている人たちが増えてきていると実感しており、そういうことを考えるとやはり人と人の接し方をきちんと身につけた子どもたちを育てていただきたいというのが、私たち企業サイドの切なる願い。そう考えると、通信制高校のニーズが高まっているから、そっちでいいよねというわけではなく、人と人とが接することは楽しいよねということを教えるのも教育の1つになっていくのだと思う。漠然とした意見で、明確な答えを持っているわけではないが、そういった観点も含めて、どうやって機会提供をしていくのかを審議していかなければならないというのが、私の今の考え。
- ・また、生成AIが出現してきた中で、最近の話題はなんの仕事が残るのか。いま花形とされるコンサルファームの仕事もいなくなるのではといった話がなされることも、私の周りではしばしばある。そんな中ではあるが、企業サイドではいまは生成AIを使ってみようよという考えが強く、使ってみてなにが良いのか、悪いのかを見極めていこうという考えになってい

る。みなが生成 AI を使いこなせて、グローバルなブームが出来てくれば、本当にいなくなる職業がもっと増えていって、最後に、人間として何が必要かというヒューマンでしかないと思う。いわゆる人間力。そこをどうやって醸成しながら、子どもたちに教育し、本当の意味でのコミュニケーション能力を身につけた子どもたちを育てていくのかということは、みなさまと是非審議していきたい。

#### <明石委員>

- ・今回、生徒の多様なニーズに応える、魅力的で特色ある府立高校のあり方ということで、本当に時期を得た諮問内容だと思う。現在、大学の現状から子どもの状況を考えたいと思うが、先ほどの事務局からの説明の中でも、3年間のコロナ禍で様々な課題を抱えている子どもがいるとあったが、大学でもコロナ禍で不登校気味の学生が見受けられる。その一番の原因はコロナに対する不安からくる恐れ、非接触・対人を避ける、心身の不調などを含め、生活リズムの乱れから学業が遠のき、その結果として学業不振につながっていると考えられる。そしてもう一つの側面は、家庭の困窮問題である。この間のコロナによって保護者の仕事が失われたり、学生自身もアルバイトが無くなるという経済的な要因から大学が遠のくという学生も見られた。こうした子どもたちの問題を踏まえ、どのように府立高校を改革していくかという点が大きな課題と思う。
- ・魅力ある学校づくり、特色ある学校づくりという点で言えば、これからの学校は学びの場であるとともに、居心地のいい場所であること、生徒の気持ちを支えるカウンセリングが重要ではないかと思う。さらに大学生の進路である卒業後のことを見ていると、やはり出口の部分、キャリア教育による将来展望が見通せることも重要であり、その意味では、ティーチングとカウンセリングとコーチングが調和された学校体制づくりが強く求められてくるのではないかと思う。
- ・私が勤める大学では、短期大学部も併設していることから、四年制に進学できずにやむを得ず短期大学に入学した学生も見られるが、彼らの多くは、学習へのモチベーションや自己肯定感が低いという課題を抱えている。しかし、2年間の学びの中で、激変する学生も多く見られる。その特徴としては、第一に学生生活に対して明確な目的や目標を持ったことが挙げられる。短大生の約4割が編入学するが、学部生となった自覚と卒業後の明確な進路が意欲的な学びになっている。第二は、クラブ活動などを通じて先輩・同僚・後輩との人間関係の繋がりで居心地のいい場所ができたことが学習への積極的な参加になっていることである。良好な人間関係づくりが重要である。この友達やこの先生がいるから、この学校を選択しようという動機になると思う。第三は、海外留学を通じ、異文化に触れるなど多様な価値観に出会う体験や経験が挙げられる。第四は、生活リズムの安定である。食事や睡眠を含め、日々の衣食住に関する生活習慣の確立が学びに直結している。
- ・以上のことから、中学校から高校、大学へと多感な思春期の時代を生きる子どもたちにとって重要な学びの課題ではないかと思う。
- ・最後に「自分は捨てたもんじゃない」という自己肯定感と、「他者から自分は大切にされている」という信頼感、そして、時には他者に助けを求めたり、周りの人々の支えになったりすることが、子どもたちの成長を促す大きな要素と考える。

- ・今日の事務局からの説明にはなかったが、魅力的で特色ある学校づくりの基本は、そこに働く教職員の元気さであると思う。審議会答申に基づく今後の府立高校の有り様が、教職員が働きがいのある職場と感じられることが前提であると思うので、審議会の取りまとめが、現場で働く教職員をより勇気づけ、子どもと共に学び、成長しようと思えるような、魅力ある府立高校改革につながればと願っている。

#### <川田委員>

- ・私は主に大学の教育に関わってきたので、その観点も含めて話をしたいと思う。コロナ後に活動が正常化する中で、日本の学校教育には課題が多くあると共に非常に多様なニーズにも応えないといけない状況で、学校教育自体が多くの困難の中で大変な曲がり角に来ていると感じている。
- ・高校の志願者が減るなかで、既に様々な子どもたちに対応した教育システムが構築されているが、通信制以外は志願者が減少しており、打つ手が狭められていると非常に心配している。
- ・高校の特色化、魅力化について文科省が方針を打ち出しているが、解決法の一つは探究学習への取組だと思う。授業の中で、もっと積極的に、高校1年から3年まで、各学校が特色のあるテーマを設定して探究学習の教育をしていくというのが一つの魅力化の方法ではないかと思う。
- ・先程、生成AIの話が出たが、今後、更にどのような新しい技術が出てくるかわからない。技術が大幅に進歩して、これに関連する領域の拡大、高度化が進展すると思う。そうしたときに、今の仕事の60%が失われると予想されているが、多くは文系の仕事だといわれている。今の子どもたちに、いろいろな対応力を備えさせて社会に送り出さないと、将来非常に困るだろうと感じている。その意味で、もう少し理系を重視した高校のカリキュラム等を作る必要があると思う。文科省が「リスキリング」を打ち出しているのも失われる仕事への対応である。
- ・文科省が理系の学部新設に補助金を出すことを推進しているが、理系の高校生が増えなければ、いくら大学を増やしても、行く人間が限られておれば、学生の質が低下する。将来のSociety 5.0 に関して、情報系の人材不足が深刻で、それも想定して理系を重視した高校教育が重要だと思う。例えば、総合科学科が大阪府にいくつか作られており、他の府県でも多様な取り組みがなされている。理系の教育は探究学習と親和性が有るので、将来を見据えて、探究学習による高校の特徴付けと魅力化を大阪府で拡大する必要があると思う。
- ・今のプレゼンテーションでも紹介されていたが、ものすごく多様なニーズがあり、働き方改革の状況下で、現陣容で全部のニーズに応えるのは、とても賄いきれないと思う。大阪府教育庁の現有のメンバーで多様なニーズに応えているとのことだが、私は企業で技術をしており、1980年代の後半頃、人が足らなくて困っているという時代があった。製造の作業担当者や設計する技術者も足らなかった。非常に苦しくなったところに、熟練技術者のいないNC工作機械やロボット、CAD、CAM、CAE (Computer Aided + Designing、Machining、Engineering) などの技術が生まれ導入され、これまでであれば実験でなければ解決不可能な問題を計算によって解決することが出来るようになった。教育も EdTech などの新技術を積極的に活用する方向性で課題を解決する方向性をこれから強めていく必要があると思う。

- ・説明の中で、一番驚いたのは多国籍の人が多く、これだけ多くの言語に対して意思疎通を図っていくのがかなり困難だと思った。一定レベル以上の教育内容に関しては、最近出てきた翻訳機を活用したり、日本語能力試験にも有効な日本語 AI 学習アプリを使うことで、短期間の学習で高い水準に到達して貰う事も必要だと考える。このような新技術を活用しながら、検証によりいろいろな知恵を加えて、上記の課題を解決しなければいけないと思う。
- ・最近 AI ツールを用いて教えるという教育方法が増えてきて、塾でもその活用が増えている。この教育方法は、教室の中ではみんな違う達成度の違うレベルの勉強をする個別最適な教育方法である。その AI を使ってやる教育のいいところは、生徒が分からないところをずっとさかのぼり、分からない部分の原因を解決する点である。つまり原因を教えて、知識を確実にしていく。理系の教育はまさに積み上げなので、このような方式が非常に良い。調べたところ、長野県では、15 校の公立高校で AI を活用した教育ソフトを使って相当効果を上げているとのことであった。これを導入したときの効果は、勉強の苦手な生徒の伸び悩みを解消できる点であると思う。このような生徒の学力向上について、非常に伸び代が大きい生徒のいる学力下位校の改善に効果があると考え。ここで紹介した学習アプリについては十分検証する必要があるので、試しに始めて十分な実績があるかを検証した上で、広めることが重要だと思う。

#### <大継委員>

- ・この3月まで大阪市教育委員会事務局に籍を置いており、教育監も務めさせていただいた。その経験も振り返り、意見させていただきたい。
- ・旧大阪市立高校については、府立高校と共に大阪全体の高校教育を担っていくという役割を明治の時代から果たしてきた。一定の約束があったのかと思慮するが、旧市立の高校は、実業系に特色のある学校が多くあり、普通科単独の高校はほとんどない。そのような役割分担を果たしながら、大阪全体の教育の底上げに努めてきた経過がある。私の経験した中では、平成 20 年に行った、併設型の中高一貫校である、咲くやこの花中学校高等学校の設置がある。中学校段階から6年間にわたって子どもたちを育てて育成していくことにチャレンジしたわけだが、この中でも様々な変化なり、教育全体に与える影響があったのではと思っている。また、大阪市立にはかつては商業高校があった。これは大阪の産業界とは深い繋がりがあり、多くの人材を輩出してきたという経過があったが、商業のあり方について大胆に見直しをしていかなければならない時期があり、結果として、平成 24 年にビジネスのスペシャリストを育成するという目的で、いくつかの商業高校を統合し、大阪ビジネスフロンティア高校を開校し、経営に関する教育にも注力した商業高校を作っていくことになった。直近では、平成 31 年に公設民営という手法を用い、国際バカロレアの認定コースを持つ水都国際高校を開校し、今現在、取組みを進めている。私の経験をざっと振り返る中でも、このような高校の大きな変化があったと認識している。
- ・事務局から説明のあった様々な大阪の状況、課題の中には、私がお阪市教育委員会の時代にも目の当たりにしていたものもあり、大阪市として高等学校の審議会を立ち上げ、諮問を行い、平成 29 年 1 月には普通科について、令和 2 年 8 月には工業高校のあり方について、答申をいただいた。大阪市教育委員会では、答申や、児童生徒の減少という課題も踏まえ、普

通科では3校を1校にし、桜和高校を作るとともに、工業高校では3校を1校に統合していく案を作成した上で、令和4年4月に大阪市立高校21校が大阪府に移管され、大阪市立高等学校が向き合っていた課題も大阪府が引き継ぎ、対応されていくという状況の中、今回は審議会委員として参加させていただいているものと思っている。

- ・今日の事務局からの説明にもあったが、やはり小学校、中学校においても不登校が非常に大きな問題になっており、不登校が減少するということではなく、一層増加をしている状況であり、大阪市では、令和6年に不登校特例校を開設するよう準備を進めている。また日本語指導の必要な子どもたちも、コロナ禍では一旦落ち着きがあったかと思うが、昨年あたりから急速に伸びている。大阪市では、日本に来たところで生活言語を習得していく初期の10日間ほどの学習を別のところでしながら、それぞれの在籍校に送り出しをし、更に日本語の追指導をしていくシステムを作っていたが、こちらにおいても、対応がとても間に合っていない状況が今も続いているという、客観的な状況がある。
- ・このような状況の中で、事務局からの今回の諮問内容、現状と課題を説明いただいたところであるが、前回の当審議会からの答申にもあった、大阪がこれまで大切にされてきた「公平性」と「卓越性」をどう両立をしていくか、そして今さらに進みつつある多様性をどのように尊重していくかと、こういう観点は大変重要なことであると感じている。これらのベースをしっかりと踏まえた上で、様々な環境にある生徒に、それぞれの学びをしっかりと保障できるような、個別最適な学習を進めていく、そして、新たな社会で、しっかりと様々な人々と協働しながら生きていく、そのような力をどう育成していくのか、そのような学びを進める府立高校のあり方について、審議会の皆さんと共に検討していければと思っている。

#### <池田委員>

- ・課題の1点目、通信制高校へのニーズが高まっている現象について、非常に興味深く拝聴した。全国で見て、通信制のカリキュラムがどのように変化しているのか精査すべきと思う。例えば、N高、S高といったインターネット環境を活用している私学の試みもよく耳にするようになった。生徒本人や保護者が通信制のどこに魅力を感じているのかを掘り下げる必要がある。柔軟に学びたいというニーズがあるなら、捻出した時間で何がしたいのかを含めた全体のキャリアプランニングが重要になってくる。
- ・2点目は、日本語指導が必要な生徒について、少数散在化し、総数で3,000人を超えるということで無視できない課題。前回の審議会でもお伝えしたが、どのような支援が必要かによって支援の仕方が変わってくると思う。試験に合格して高校へ入学しているという前提で話すと、基礎的な日本語を話せないというレベルではない。そこから高校での学習についていくことや大学進学を考えると、どのような伴走支援をするべきかで多様なニーズが生まれてくると思う。これがさらに少数散在化しているため、一対一で個人の学習に寄り添うのは難しい環境にあるが、GIGAスクール構想によって配備されたデバイスを活用するのは一つの解決法ではないか。ただ、デバイスが整備されたとしても、生徒のリテラシーの醸成や教員のスキルアップも必要になってくると思う。
- ・最後に、高校の魅力づくりについて、大阪府のホームページや高校のパンフレットを見ても、高校がどこにあって、こういった行事をしていてといったファクトの情報は載っているが、

学校の特色は誰に対して伝わるようになっていくのか。誰が情報を受け取って、その学校を選びたいと判断しているのか。広報のチャンネルとして他に何か考えられるものはないかとも思った。

<小酒井委員>

- ・大阪府にとって、高校はどのような教育機関かということも議論した方がいいと思う。高校が成績を上げるための学習に走り、受験勉強をする場所になってしまうことを危惧している。子どもたちには人格形成も含めていろんなことを学んでもらいたいし、文系理系の区別を乗り越えるべき。学際的な学びや地域と連携した学びは、非常に大事だと思っている。どのような人間を形成するためにどのような学びを入れていくのか、というところは考えていくべきだと強く感じた。
- ・ICTの話だと、学ぶことにしんどさを感じている子どもたちが使うこともあるし、今の時代に打ち出していかなければならない探究的な学びということにも使うことができる。ICTをどのように使っていくか、より柔軟に多様な学び方にどう対応させていくか。非常にアダプティブに学ぶことがICTで可能になってきているのは確かであるし、そこで空いた時間を使って探究的な学びや特色のある学びをしていくといったようなことを高校の中でも展開できるといいと思う。
- ・高校の特色化・魅力化について、高校というのは魅力あるように作ることが元々あると思うが、特色ある学びを追求していくことが今後の課題。学区が無くなっても旧学区内の高校に通っていることは、どこに行っても一緒だと思われているからではないか。どのような学びを追求するか、どのような学び方ができるかといったところを含めると、高校を選択するところに行き着くと考えている。学際的な学びでも地域と連携した学びでも、何かに偏って、これだけ勉強すればいいということではなくて、様々な学び方があることを捉えていくべきだと思う。特に、通信制が課題として出ていたが、通信制という手法が受けているのではなくて、その手法を使った上で、どのような学び方をしている学校だから、という選び方をされていると思う。先ほども名前が挙がっていたような学校というのは、我々がイメージする通信制とは全く違うことをやっている点が評価されていることを考えると、通信制と一緒に議論するのではなく、どのような学びを提供しているかといったところから議論を始めるべきだと思う。
- ・また、日本語指導については、大学で教えている限りでは、日本でずっと住んでいる方でも、読書が得意ではない印象があり、社会問題化しているという認識を持っている。全入時代になってくると、しんどい思いをしながらレポートを書く方も増えてくる。特定の方に限らず、国語をしっかり学ぶことは課題だと思っているので、そのあたりも考えていく機会があるといい。

<小原委員>

- ・小原です。専門は、経済学です。
- ・まず、小酒井委員がおっしゃった内容と、重なるところがあるが、通信制が増えてきているのは間違いはないが、多すぎるのかどうかという点については、判断がつかない。他国と比較



すると、日本は突出して、形の決まった高校に行く生徒が多い。日本は、ホームスクーリングなど、他の形を取る生徒は少ない国だと思う。他国だと、ホームスクーリングしている子どもたちは、たいてい通信教育も一緒に受講していると思う。通信制への進学が増えること自体を課題としたり、通信制への進学を減らして、いわゆる通常の高校に進学させることをめざすのではなく、この傾向を認めた上で、通信制への進学が増えたときの問題点や不足する部分、例えば卒業して就労する際に課題となる点を地域が支えられたらいいのではないか。例えば、通信教育であるから、不登校にならず、学びを続けられる生徒もたくさんいると思う。高校に所属していると、不登校になり、学びが止まるが、通信制であれば学びを継続して身につく、しかし、それ以外の面で、身につかないものがあるなら、課外教育をサポートする地域のコミュニティは、他国含めて、様々あると思うので、地域や府が支えるという観点も一つなのか思った。

- ・二点めは、不登校について、不登校によって教育がとまってしまう事態を避けたいのと思うが、不登校は、どのようなグループ、どの学校で多いのかという点は知りたいと思った。そこから、課題が分かるのではないかと思う。
- ・三点めは、学校入学後に合わなかった場合の受け入れ、他校への転入できるかが大事ではないかと思う。私立進学した後に公立、またその逆など、不登校となったあとに、スムーズに他の学校に移れるよう制度を充実させることも、手立ての一つではないかと思った。
- ・四点めは、日本語指導が必要な生徒についてだが、教育をスムーズに行う必要性については各先生方のおっしゃったとおりだと思うが、これらの層は、日本語や文化を多少知っているため、本来ならば就労しやすい層であり、直接、外国から来日する外国人労働者とは異なる点がある。その点がうまく就労に結びつくような支援、つまり勉強だけでなく子どもたちの将来の仕事に繋がるような支援が大事ではないかと思う。
- ・最後に、「定員割れ」「志願倍率」「志願割れ」についてだが、少子化が加速度的に進んでいるので、分母を大きくおいていけば、当然割れていく。前回の審議会でも議論があったが、そもそも受け入れの適正規模についての検討は避けて通れないのではないか。定員割れの数だけが独り歩きするのは、よくないのではないか。適正な規模というのを考える機会があってもいいのではないかと思う。

#### <小田会長代理>

- ・大阪大谷大学教育学部の小田です。
- ・私の専門は、特別支援教育だが、「特別」は必要なくなり、支援は、全てにわたって必要であろうと思う。大学の現状、中学生・高校生の教育相談、発達相談に関わっている点からお話する。
- ・一点めは、不登校が大阪でも増加しており、影響している部分が大いなのだと思うが、大学や教育相談で学生や生徒に関わると、以前は、全日制高校に入学後、うまくいかないと、進路変更として通信制に移るといった生徒が多かったが、今は、中学校卒業後、ストレートに通信制に入学する生徒が非常に多くなっていると思う。話を聞くと、中学校ではしんどい思いをしたので、高校であまり無理をせずに、大学でリスタートするという考え方が根底にあるようだ。そのような子どもたちが全てではないかもしれないが、そういった点では、学力が

比較的高い子どもたちも通信制に入学し、大学入試に合格していることからすると、通信制の学校も、進学実績を出している。これも大きな魅力の一つになっているのではないかと。通信制の広報からそのような情報を、受け取っているのではないかと。

- ・また、不登校は現象であり、発達特性・愛着・学力の課題、家庭環境など要因が様々であるので、同時並行して、幼児教育、小学校・中学校の教育を充実していくことで、根本的に不登校に至らないようすることも、非常に大事だと思う。当然、これまでも実践していることだと思うが、さらに充実させることが必要ではないか。大学でリスタートする学生の中には、適応している子がいる。例えば、大学の相談機関をしっかりと活用し、自分自身のヘルプを出せる生徒は適応している。加えて、大学は、自分にあったカリキュラムを自分で編成できるので、そういった点で、大学から適応できる学生がいるのだと感じる。その観点から、ステップスクールでの生徒に応じた取組みについては、今後、期待されることだと思うし、今後の展開についても興味深く思っている。また、自分の生活スタイルに合わせて学ぶ時間帯を選択するという、まさに大阪わかばの取組みは、より周知されてもいいのではないかと。生徒が適応していく要素が含まれているのではないかと。多部制単位制の、自分自身で選び、自分のスタイルに合わせていく点は、大きなアピールにもなると思う。
- ・三つめは、今回、選抜制度が諮問事項になっており、これから検討していくということになるが、大学の現状を見ると、多様な推薦制度があり、選抜時期も早くなっている。AOが総合選抜になり、例えばプレゼンテーション型、ディスカッション型などの手法をもって、時期もだんだん早く、年内に決めようという傾向にあるし、それは、高校生側のニーズでもあるのではないかと。そのような観点から、高校の選抜を検討する際、内容とともに、時期をいつにするかによってもずいぶん違ってくると思うので、時期も検討材料の一つなのではないかと。
- ・また、何らかの形の推薦があるかないかということが大きく話題になっていると聞いているので、高校の選抜においても興味を持たれることだと思うので、子どもたちの適性に応じた選抜の方法・時期を検討していくことが、これからの展開に繋がってくるのではないかと。一つめの不登校に対する現状とともに、小学校・幼児教育などの充実、自分のスタイルに応じたステップスクール・多部制単位制の取組みの周知、そして選抜の方法・時期についての意見を述べさせていただいた。

#### <浅野会長>

- ・大阪府立高校のあり方を考えることは、ただ単に大阪府のことだけを考えることではなく、全国的にもモデルになる気がしている。大継委員の意見にあったとおり、市立高校と一緒になった公立を大阪府は所管しており、政令市があるような、比較的大きな都道府県の一つのモデルであると言える。つまり公立高校はどのような打って出ることができるのか、それを世間から見られていると思う。
- ・また、公立高校に限らず、経営の組織体の指名は「顧客の創造」、お客さんを想像すること。つまりはお客さんを増やすのではなく、もっと役に立つ存在になっていくのだという意味。もっと役に立つ存在になるということは、新たに出てきたニーズを敏感に察知し、そこに応え続けるということだと思う。今回のテーマにもある「多様なニーズ」というのは、量的拡大のニーズではなくて、これまでとは質的に違う。これまでの高等学校は、すこし例えば悪

- いが、少品種・大量生産のスタイル、それが多品種・少量生産になってくる。なので非常にシステムが難しくなってくる気がする。そういった新しい、質的に異なったニーズへの対応を単独の学校に任せるのは難しいと思う。各学校校長は一生懸命やっておられるが、2年、3年で新しいニーズに対応し、様々な手を打っていくというのは多分難しいと思う。
- ・先日、他府県の学び直しに取組まれている学校を視察した。当該学校は県教委のバックアップがない中でも、学校で様々な工夫を行われていたが、学校長が変わったら、いまの取組みは続かないなあと感じるものは結構あった。なので、学校レベルで任せて、何とか頑張ってくれとお願いするのは、いろんな工夫ができて、ある程度は進むが、所詮はさざ波、大きな波にはならない。野球に例えると、選手1人1人のバッティングの工夫をしてもらうのではなく、ベンチから指示がやはり必要となる。そういったものが、今回私たち審議会に望まれていることかと思う。
  - ・特に、大阪府教育委員会はこういった状況の変化にこれまでも取り組まれてきて、ある程度成功していると認識している。ずいぶん前の話になるが、いわゆる課題研究を普通科でやり始めたのは大阪府。それが今、全国に広がっている。高等学校と特別支援学校の協働による様々な新しい仕組みを作ったことや、エンパワメントスクールも非常に良かったと思う。つまり、大阪のやり方というのは、今回のテーマのように、一定のニーズがありそうだとこのころに、新しい仕組みを作ってから試すのではなく、少し古い表現にはなるが、威力偵察のように、まずは人員を派遣してやってみる、このようなやり方で進めてこられた。文理学科についても、当初は全体の半分やって、そして全体に広げる。エンパワメントスクールも8校を設置し、そのうち2校をステップスクールにする、こういう進め方が比較的うまくいっているのかなと思う。なので、今回もいろんな議論をする中で、こういうことやってみよう、こういうのを何校でやってみようというようなものが出てくれば、非常にいいと思う。
  - ・ただ、大阪府の中でテストマーケットというか、威力偵察が欠けているのは通信制。小酒井委員の意見にもあったように、その部分は若干弱いと感じている。今回の審議の中ではそのような部分に目を向けていくことだと思っている。
  - ・そして、ニーズへの対応のいう視点では、今、多様なニーズが出てきているわけだが、この時に手を打つことがやはり基本だと思う。こういったニーズは非常に大きくなり、後追いでそれに対応するのではなく、兆しがある時にある程度力を入れ、それに対応してみる。それによってその反応を踏まえ、また次の展開を考える。これがおそらく大阪府教育委員会が以前から進められているやり方のパターンのような気がする。
  - ・今回、教育委員会の方から課題になりそうなものをピックアップしていただいた。そういったものに対して、どういう手があるのか、全国を見るといろんな事例があると思う。教育委員会でやっていない例でも、単独の学校でやっていることはあると思う。なので、2年前の審議会のように、ゲストスピーカー等に来ていただいて、事例を紹介いただくことで、いろんなヒントが出てくるのではとも思う。
  - ・ちょうどいいタイミングで、多様なニーズに対応しようとする、その大阪府教育委員会の取組みを、是非この審議会でも一緒になって考え、いいヒントが出せればと思う。

<事務局 | 仲谷教育振興室長>

- ・先ほど小原委員から、通信制高校が多い点に問題があるのではないか、とご指摘いただいた。事務局の説明が十分でなかった点があったので、補足させていただく。事務局として、通信制が多いことが問題であると捉えているのではなく、浅野会長からもご意見をいただいたが、今の時代のニーズに合わせて、大阪府教育委員会としてどういった学校が重要なのか、どういった学校をニーズに合わせて作っていかないといけないのかということを考えている。
- ・通信が多いということだけをもって、それが問題で、いわゆる全日制に来てもらわなければならないということではないという点をご了解いただきたい。

(4) 閉会

- 事務局より、次回開催を8月16日(水)10時から予定している旨、連絡。
- 閉会